Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University, 2016, Vol. 18, 55−69.

論　文

小学校高学年における友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響

松下　理央・今城　周造

Elementary school students' friendships, class adjustment, and anxiety about junior high school

Rio MATSUSHITA and Shuzo IMAJO

Relationships between friendships, class adjustment and anxiety about junior high school was investigated in elementary school students. Participants were elementary school students in Grades 5 and 6 (N = 266). They responded to four types of inventories that assessed conformity with friends; psychological distance from friends; class adjustment; and anxiety about junior high school. Results indicated that in order to reduce anxiety about junior high school in boys, it was important for them to have a close psychological distance from friends and to be relied-on in class. Moreover, close psychological distance proceeded interpersonal anxiety for students in Grade 6. These finding are discussed in relation to the transition from elementary to junior high school.

Key words : upper grade elementary school students（小学校高学年）, friendships（友人関係）
class adjustment（学級適応感）, anxiety about junior high school（中学校生活予期不安）

問題と目的

発達段階から見た友人関係と適応感

近年、青年期の友人関係について、同調性と心理的距離の 2 側面から捉える研究が多くされている。同調性とは、「仲間はずれにならないようにして、とにかく一緒に行動し、遅れたり外れたりしないようにする（上野・上瀬・松井・福富, 1994）」行動であり、心理的距離とは、「自己が、ある他者との間でどれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合い（金子, 1989）」である。青年期の友人関係には、仲間はずれにならないように強い同調性を示す一方で、友人と心理的距離を保ち、お互いの内面を開示せず表面的な関係を築こうとする特徴がある（e.g., 岡田, 2002；上野他, 1994）。

こうした希薄化した友人関係は、一見うまくいっているように見える。しかし、他者と関係が深まることを避け、気遣いが強い者ほど対人ストレスが高いなど（橋本, 2000）、希薄化した友人関係は必ずしも適応的であるとはいえない。石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口（2009）は青年期に特徴的とされる、表面的には友人に同調するが心理的な距離は遠い「表面群」は、中学生では心理的適応が低く、高校生では心理的適応に加え学校適応も低いことや、同調性が高く心理的距離が近い密着した友人関係を築く「密着群」は、中学生では適応的であったものの、高校生では学校適応は高いが心理的適応は低いことなどを明らかにした。

このように、友人関係が適応感に与える影響は発達段階によって異なることが明らかにされているが（石本他, 2009）、小学生を対象とした研究は青年期を対象とした研究に比べて少なく、まだ十分とはいえない。ただし、小学校 4 年生から 6 年生が学校生活で感じる最大のストレスは友人関係であることから（長根, 1991）、小学生にとって友

人関係は学校生活における重要な要素となっているといえる。

小学校高学年の仲間関係はギャング・グループと呼ばれ、そこでは外面的な同一行動による一体感が重要とされる（保坂・岡村, 1986）。その一方で、友人に対して同調性を強く持つことは、ピア・プレッシャーが高まることも意味する（保坂, 1998）。すなわち、友人に合わせてグループに所属することをしないとグループからはずされ孤立してしまう不安が高まると考えられる。

このように、小学校高学年の子どもにとって同調性は友人関係を築く上で重要である一方で、孤立を避けたいという理由で過度に友人に合わせていることは心理的な負担になり、適応的とはいえないと推測される。不適応状態になった場合、悩み・深刻度が高い生徒は友だちや先輩・後輩に相談する傾向がある（山口・水野・岩隈, 2004）。また、中学校入学前後でソーシャル・サポート提供者の中心が両親から親しい友だちへ移行することも知られている（尾見, 1999）。すなわち、子ども達にとって不適応に陥った場合のサポート源は、心理的な距離の近い親密な友人であると考えられる。これらのことから、友人に過度に合わせるのではなく、友人との心理的な距離を近く取り親密な関係を築くことが学校生活を送る上で重要と推測される。

学級適応感

小学生は中学生や高校生に比べてクラスで過ごす時間が大半であり、クラス遊びやグループ学習などの時間も多い。また、中学生はクラスだけでなく部活でグループを作る子どもも多いが、小学生はクラスにグループを作る（坂口, 1999）。さらに、小学校は学級担任制であるため、担任教師との関係が子ども達の学校適応感に与える影響も大きいと考えられる。これらのことから、クラスの中で友人や教師と円滑な関係を築くことが小学校で適応していく上で重要といえる。従って、小学生の学校適応感を検討するためには、クラスで過ごすときの適応感に注目する必要がある。

先行研究では、学校適応感は、友人や教師との関係や学業など、研究者が設定した要因の集合として測定されることが多かった（e.g., 小泉, 1995）。しかし、友人関係には価値を置いても学習面には価値を置かず、学習面でうまくいっていなくとも学校に適応していると感じている子どももいると考えられる。すなわち、研究者が設定した要因が必ずしも学校適応感に結びついているとは限らない。従って、小学生の学級適応感を検討するには、子ども達自身の主観的な視点からの適応感にも注目する必要があると考えられる（三島, 2006）。

江村・大久保（2012）は、「学級に合っている―合っていない」という児童自身の内的基準から適応状態を測定する小学生用学級適応感尺度を作成し、学校生活の要因（教師との関係、友人との関係、学業）が児童の学級適応感に与える影響について検討した。なお、小学生用学級適応感尺度は、「居心地の良さの感覚」、「被信頼感・受容感」、「充実感」の３下位尺度から成る。その結果、小学校は教師との関係が学級への適応感に与える影響が大きいことや、中学生や高校生に比べて学業が学級への適応感に結びつかない可能性を指摘している。

以上のことから、小学生の学校やクラスへの適応状態は中学生や高校生とは異なるものと考えられる。小学校高学年期ではクラスで友人や教師を信頼し、安心できる感覚を得ることが重要であろう。

中学校入学に伴う不安と不適応

人は人生の中で様々な環境の変化を経験する。例えば、保育園や幼稚園の入園、小学校入学、中学校入学、高校進学、大学進学、就職、結婚、出産などの様々な環境変化がある（小泉, 2010）。新環境への移行は、それ以前に構築されていた個人とその環境との安定的な関係が一時的かつ急激に崩れ、移行後に新環境と個人との間に調和のとれた状態を再構築する必要に迫られる危機的な環境移行と言われている（南・浅川・福本・古河・松本・古川, 2012）。

小学校を卒業し中学校へ入学することは、物理的にも精神的にも大きな変化を経験する危機的な環境移行の一つである（山本・ワップナー, 1991）。例えば、生徒は学級担任制から教科担任制への移行、新しい友人関係の構築、部活動への参加、上下関係などの様々な変化に対応する必要がある。こうした環境面での変化に加え、中学生になると第二次性徴を迎え、身体的変化にも精神的にもとまどいや不安を感じやすい（Newman &

Newman, 1975)。

こうした小学校から中学校への危機的な環境移行において、不適応状態となる生徒も少なくない。文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2014) によると、平成25年度の学年別不登校児童生徒数は、小学校で24,175名、中学校で95,442名となっている。注目されるのは「中1ギャップ」と言われているように、小学校6年生の不登校児童数は8,010名であるのに対し、中学校1年生では22,390名であり、小学校から中学校への移行時に不登校の生徒が急激に増えていることである。

中学校への環境移行を控え、小学生はどのような困難や不安を感じるのであろうか。南・浅川・秋光・西村 (2011) は小学校6年生から中学校1年生にかけて縦断的に調査し、中学校生活予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係を明らかにした。南・浅川他 (2011) は、予期不安について「自己の存在を脅かす可能性のある出来事や場面に対する一過性の状況反応である」とし、具体的には「① 新環境にうまくなじめるか、② 新環境で自分の存在が承認されるか、③ 新環境で何か嫌なことがあるのではないかといった内容で表出されるもの」と定義している。この研究によると、中学校生活予期不安は学校生活に適応しようとする上で感じる「社会・文化的不安」と、対人関係を構築していく上で感じる「対人的不安」の2つの領域から成り、中学校入学前の予期不安が高いほど、入学後の学校適応が低い傾向が見られた。南・浅川他 (2011) は中学校予期不安が高い生徒に対して情緒的安定性を高める取り組みの必要性を指摘しているが、中学校への環境移行に伴う不安を軽減する要因はまだ十分に研究されていない。

山本・ワップナー (1991) は、緊張を過度に感じる者にとって、新環境での様々な刺激は強いストレスとなると述べている。その一方で、新しい学校生活を迎える心地よい緊張感と期待感を楽しめる生徒は、期待通りあるいはそれ以上のポジティブな経験を学校生活のなかで得る可能性についても指摘している。すなわち、中学校生活に適応するためには、中学校への期待が高いこと、少なくとも中学校生活予期不安が低いことが必要であると考えられる。米澤・内藤・浅川・水振 (1985) は、中学校進学前の適応感の高低によって新入生をH群・M群・L群に分け中学校入学後の適応過程を検討したところ、一学期末でもH群はL群よりも適応感が高いことを明らかにした。従って、中学校入学前の小学校高学年期に友人と心理的なつながりを持った関係を築き、クラスで安定した関係を築けることは新しい生活への期待感を高め、中学校入学への不安を低減すると推測される。

本研究における定義：心理的距離の近さ、学級適応感

本研究では、小学校高学年の友人関係を同調性と心理的距離の近さという2側面から捉える。後者は元来、金子 (1989) が心理的距離と呼んだものであるが、これでは得点が高いほど心理的な距離が遠いと考えられやすい。本研究では、友人と心理的に近い親密な関係であることに注目したいため、心理的距離の近さと呼ぶことにする。

また、学級適応感については、江村・大久保 (2012) はその明確な定義をしていないが、学級適応感は「学級に合っている－合っていない」という児童自身の内的基準に基づくと述べている。このことから本研究では、学級適応感を「子ども自身が学級に合っていると感じる程度」と定義する。また先述のように、学級適応感は、「居心地の良さの感覚」、「被信頼感・受容感」、「充実感」の3因子から成ると仮定する。

目的

本研究では、小学校高学年期における友人関係が、学級適応感および中学校生活予期不安に与える影響を明らかにすることを目的とする。本研究の知見から、中学校で急激に増える不登校を予防するための、小学校高学年期における有効な支援の示唆が得られると期待される。なお、中学生と高校生を対象とした石本他 (2009) の研究は、女子のみを対象としているが、男子と女子とでは友人関係の特徴が異なることが指摘されている (e.g., 赤坂, 2009; 松嵜, 2008; 坂口, 1999)。また、中学校入学が間近に迫った6年生と高学年になったばかりの5年生では、中学校への意識が異なると考えられる。従って、男女差や学年差についても探索的に検討する。

本研究の仮説は以下の通りである。

仮説1：友人との心理的距離が近いほど学級適応

感が高まり、中学校生活予期不安は低くなるであろう。
仮説2：友人への同調性が高いほど学級適応感が低くなり、中学校生活予期不安は高くなるであろう。

方　法

調査協力者

小学校5，6年生を対象とした質問紙調査を行った。協力者は公立小学校2校の小学校5年生142名、小学校6年生124名、計266名（男子113名、女子131名、性別無記名22名）であった。有効回答者は204名（男子82名、女子108名、性別無記名14名）であり、そのうち、小学校5年生は109名（男子49名、女子53名、性別無記名7名）、小学校6年生は95名（男子33名、女子55名、性別無記名7名）であった。なお、クラス数は1校が各学年3クラス、他方が各学年2クラスであった。平均年齢は10.58歳（*SD* = 0.61）であった。

調査時期

2014年5月に実施した。

調査手続きと倫理的配慮

担任教諭に実施マニュアルを渡し、質問紙調査の実施を依頼した。回答に正答や望ましい答えはないことや成績には関係がないこと、教師や家族に回答を教えないこと、答えにくい質問やわかりにくい質問があった場合はいつでも回答をやめられることを質問紙の表紙に明記するとともに、担任教諭が口頭で教示した。また、回答は無記名で行ない、回答後は協力者自身がその場で粘着テープ付き封筒に密封の上、担任教諭が回収した。実施時間は20分程度であった。

なお、小学校校長には事前に調査協力依頼を行い、調査結果は研究目的以外には使用しないことを伝え、了解を得た。本調査は昭和女子大学心理学系倫理問題検討委員会において承認を受けた上で実施した（承認番号2014-1号）。

調査内容

質問紙は以下の4つの尺度と協力者の属性についての質問項目で構成した。なお、いずれの尺度も項目数や質問内容について小学校教諭2名に検討してもらい、尺度の変更点については事前に尺度作成者の了解を得た。

友人への同調性尺度　友人に対する同調性を測定するために、中学生及び高校生を対象として作成された「友人への同調性尺度（石本他，2009）」を小学生にもわかりやすいよう項目数や内容を調整して使用した。尺度は9項目から成り、「学校の中で1番なかのよい友だちやなかよしグループを思いうかべてください。あなたはふだん学校でその友だちやグループといるときに、どのような気持ちでいますか。それぞれのしつもんについて、1～5の中から1番あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。」という教示のもと、「1. ぜんぜんあてはまらない」～「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。高得点であるほど友人への同調性が高いことを表す。

友人との心理的距離の近さ尺度　親友・父親・母親との心理的なつながりや親密さを測定する「心理的距離尺度（金子，1989）」を友人との心理的なつながりや親密さを測定するために用いた。また、この尺度は高校生と大学生を対象として作成された尺度であるため、小学生にもわかりやすいよう項目数や内容を調整し使用した。なお、否定的な表現の内容も含まれていたため、協力者が児童であることを考慮しすべて肯定的な内容とした。尺度は8項目から成り、「学校の中で1番なかのよい友だちやなかよしグループを思いうかべてください。あなたはふだん学校でその友だちやグループといるときに、どのような気持ちでいますか。それぞれのしつもんについて、1～5の中から1番あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。」という教示のもと「1. ぜんぜんあてはまらない」～「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。高得点であるほど友人との心理的距離が近いことを表す。

学級適応感尺度　クラスへの適応感を測定するために、「小学生用学級適応感尺度（江村・大久保，2012）」を項目数や内容を調整し使用した。項目数が15項目と多いため、協力者の負担を考え、因子負荷量が.50以下の2項目を削除し使用した。また、抽象的で児童には理解が難しいと思われる項目は具体例を示し回答しやすいよう考慮した。尺度は13項目から成り、「あなたはクラスですごすときにどのような気持ちでいますか。それぞれのしつもんについて、1～5の中から1番あてはまる番号に1つだけ○をつけてください。」

という教示のもと、「1. ぜんぜんあてはまらない」～「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。高得点であるほど学級適応感が高いことを表す。

中学校生活予期不安尺度　中学校入学への不安について測定するために、「中学校生活予期不安尺度（南・浅川他, 2011）」を項目数や内容を調整し使用した。項目数が16項目と多いため、協力者の負担を考え、因子負荷量や内容を考慮し4項目を削除し使用した。また、抽象的で児童には理解が難しいと思われる項目は具体例を示し回答しやすいよう考慮した。尺度は12項目から成り、「中学校について感じていることをお聞きします。それぞれのしつもんについて、1～5の中から1番あてはまる番号に1つだけ〇をつけてください。」という教示のもと、「1. ぜんぜんあてはまらない」～「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。高得点であるほど中学校生活予期不安が高いことを表す。

属性についての項目群　協力者の学年、年齢、性別の記入を求めた。

結　果

各尺度の項目分析

いずれの尺度も選択肢の「1. ぜんぜんあてはまらない」は1点、「2. あまりあてはまらない」は2点、「3. どちらでもない」は3点、「4. すこしあてはまる」は4点、「5. とてもあてはまる」は5点と得点化した。

友人への同調性尺度　友人への同調性に関する9項目について、因子数を1に固定して主成分分析を行ったところ、すべての項目が第1主成分に.50以上で負荷していたため（Table 1）、この9項目で「友人への同調性尺度」を構成した。内的整合性を検討するためにCronbachのα係数を算出したところ、$\alpha = .85$であり信頼性は高かった。なお、本研究では、これら9項目の合計点を項目数で割った値を「友人への同調性」の尺度得点とした。

友人との心理的距離の近さ尺度　金子（1989）の「心理的距離尺度」は1因子構造であったため、友人との心理的距離の近さに関する8項目について主成分分析を行ったところ、すべての項目が第1主成分に.75以上で負荷していた（Table 2）。従ってこの8項目で「友人との心理的距離の近さ尺度」を構成した。内的整合性を検討するためにCronbachのα係数を算出したところ、$\alpha = .92$であり信頼性は高かった。なお、本研究では、8項目の合計点を項目数で割った値を「友人との心理的距離の近さ尺度」の尺度得点とした。

学級適応感尺度　学級適応感に関する13項目について、最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況（7.47,1.70,0.94,0.46…）と因子の解釈可能性より、2因子構造が妥当であると考えられた。2因子解を指定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、明確な2因子構造が得られた（Table 3）。

第1因子は、「このクラスにいると安心する」、「このクラスにいるとおちつく」、「このクラスに

Table 1　友人への同調性尺度の主成分分析結果

		第1主成分	共通性	平均値	標準偏差
6	友だちと同じことをしていないと不安だ	.78	.61	3.68	1.12
9	友だちと話が合わないと不安だ	.77	.60	4.10	1.05
5	仲間はずれにされたくないので、話をあわせる	.76	.58	4.18	1.14
4	友だちの間で、はやっていることについていかないと不安だ	.69	.48	3.00	1.29
1	できるだけ友だちと同じように行動したい	.66	.43	2.89	1.25
8	自分は違う考えでも、友だちの考えに合わせたい	.65	.42	2.56	1.22
7	友だちと意見が違うと自分の意見を変える	.64	.40	2.33	1.12
3	仲間はずれにされるのはぜったいにいやだ	.60	.36	2.37	1.14
2	いつも友だちといっしょだと安心する	.54	.29	2.70	1.25
	説明率				46.17

Table 2　友人との心理的距離の近さ尺度の主成分分析結果

		第1主成分	共通性	平均値	標準偏差
2	友だちは私の気持ちをよくわかってくれていると思う	.87	.75	4.23	0.99
6	友だちとうまくいっていると思う	.86	.75	3.76	1.11
3	友だちとわかりあえていると思う	.86	.73	3.77	1.07
7	友だちとは、本当の気持ちを言い合える	.81	.66	4.05	1.01
4	友だちと気が合う	.80	.64	4.16	1.09
1	友だちをとても信らいしている	.76	.58	3.95	1.10
8	友だちには、ひみつやなやみごとを話すことができる	.76	.57	3.60	1.30
5	友だちといっしょにいると安心する	.75	.56	3.33	1.38
	説明率				65.47

Table 3　学級適応感尺度の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

		Ⅰ	Ⅱ	平均値	標準偏差
2	このクラスにいると安心する	**.91**[a)]	-.08	3.38	1.20
1	このクラスにいるとおちつく	**.90**	-.12	3.27	1.21
4	このクラスにいると楽しい	**.88**	-.04	3.31	1.19
3	このクラスにいると気持ちが楽になる	**.85**	-.05	3.85	1.17
5	このクラスにいるときはしあわせである	**.81**	.06	3.13	1.18
13	このクラスにいるとがんばろうという気持ちになる	**.70**	.13	2.86	1.11
12	このクラスには自分が夢中になれることがある	**.60**	.13	2.91	1.12
11	このクラスでは自分の目標に向かってがんばることができる	**.59**	.16	2.93	1.10
10	このクラスにいると何か（勉強や係の仕事、遊びなど）ができてうれしいと思うことがある	**.54**	.24	2.76	1.13
8	このクラスでは先生や友だちの役にたっていると思う	-.04	**.92**	3.71	1.25
6	このクラスでは先生や友だちからたよられている	-.06	**.90**	3.40	1.24
7	このクラスでは先生や友だちからみとめられている	.07	**.82**	3.36	1.32
9	このクラスでは先生や友だちから好かれていると思う	.08	**.72**	3.30	1.29
	因子間相関	Ⅰ	Ⅱ		
	Ⅰ	－	.60		
	Ⅱ		－		

[a)] 因子負荷量が.50以上の因子負荷量を太字で示す

いると がんばろうという気持ちになる」など、クラスで安心感や充実感を経験する項目に高い因子負荷量を示していたため、「安心感・充実感」と命名した。第2因子は、「このクラスでは先生や友だちの役にたっていると思う」、「このクラスでは先生や友だちから たよられている」など、クラスで頼られ役に立っていると感じたり、認められていると感じる項目に高い因子負荷量を示している。江村・大久保（2012）はこの因子について、「被信頼感・受容感」と命名している。しかし、被信頼感・受容感というと、頼られている感覚や役に立っている感覚が十分に表せないと考えられる。そこで、本研究では、「役割感・受容感」と命名した。なお、因子間相関は$r = .60$であった。

次に、それぞれの因子に0.5以上の因子負荷量を示した項目から、因子名と同名の下位尺度を構成した。内的整合性を検討するために各下位尺度のCronbachのα係数を算出したところ、「安心感・充実感」では$\alpha = .94$、「役割感・受容感」で

はα＝.91であり、信頼性は高かった。なお本研究では、各下位尺度の合計点を項目数で割った値を下位尺度の得点とした。

中学校生活予期不安尺度　中学校生活予期不安に関する12項目について、最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況（6.65,1.66,0.68,0.61…）と因子の解釈可能性から2因子構造が妥当であると考えられた。2因子解を指定して、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、明確な2因子構造が得られた（Table 4）。

第1因子は、「なかのいい友だちができるかどうか心配だ」、「部活動の友だちとなかよくできるか不安だ」など、対人関係に関する不安に関連した項目に高い因子負荷量を示していたため、「対人的不安」と命名した。第2因子は、「小学校よりも、きまりがきびしくなりそうで不安だ」、「小学校にくらべると自由がなさそうなので心配だ」など、中学校の決まりの厳しさといった生活面での不安や学業への不安に関連した項目に高い因子負荷量を示している。南・浅川他（2011）はこの因子について学校生活に適応しようとする中で感じる不安として、「社会・文化的不安」と命名している。しかし、社会・文化的不安というと、範囲が広く中学校への決まりや学業への不安であるとイメージしづらいと考えられる。そこで、本研究では「学業・生活不安」と命名した。なお、因子間相関はr＝.61であった。

それぞれの因子に.50以上の因子負荷量を示した項目から、因子名と同名の下位尺度を構成した。内的整合性を検討するために各下位尺度のCronbachのα係数を算出したところ、「対人的不安」ではα＝.92、「学業・生活不安」ではα＝.90であり、信頼性は高かった。なお本研究では、各下位尺度の合計点を項目数で割った値を下位尺度の得点とした。

各尺度間の関連性

全体の相関係数　各尺度間のPearsonの相関変数を算出した（Table 5-1）。友人への同調性は友人との心理的距離の近さ及び安心感・充実感、役割感・受容感、対人的不安、学業・生活不安との間、友人との心理的距離の近さは安心感・充実感及び役割感・受容感との間、安心感・充実感は役割感・受容感との間、対人的不安は学業・生活不安との間に有意な正の相関が見られた（r＝.17～.61）。

男女別の相関係数　男女別に各尺度間のPearsonの相関変数を算出したところ、男女で関連性が顕著に異なるものがあった（Table 5-2）。例えば、

Table 4　中学校生活予期不安尺度の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン）

		Ⅰ	Ⅱ	平均値	標準偏差
8	なかのいい友だちができるかどうか心配だ	**.96**[a)]	-.10	3.57	1.31
7	部活動の友だちとなかよくできるかどうか不安だ	**.83**	.03	3.28	1.31
9	ちがう小学校の出身の生徒となかよくなれるか不安だ	**.80**	-.01	3.42	1.33
11	知らない先生なので親しみが持てるかどうか不安だ	**.77**	.06	3.54	1.33
12	部活動の先生とうまくやっていけるか心配だ	**.73**	.07	3.75	1.28
10	友だちからなかまはずれにされないか心配だ	**.71**	.10	3.22	1.37
1	小学校よりも、きまりがきびしくなりそうで不安だ	-.15	**.96**	3.11	1.39
2	小学校にくらべると自由がなさそうなので心配だ	-.06	**.91**	3.05	1.46
3	中学校の先生にはきびしい先生が多そうなので心配だ	.07	**.75**	3.05	1.46
4	授業がむずかしくなるのでついていけるか心配だ	.14	**.63**	3.25	1.44
6	ふだんの生活面(制服や校則)にきびしい先生がいるのではと不安に思う	.20	**.58**	3.05	1.26
5	中学生は時間に追われていそがしいと思う	.11	**.56**	3.07	1.34

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	－	.61
Ⅱ		－

[a)] 因子負荷量が.50以上の因子負荷量を太字で示す

Table 5-1　各下位尺度間の相関係数

	友人への同調性	友人との心理的距離の近さ	安心感・充実感	役割感・受容感	対人的不安	学業・生活不安
友人への同調性	−	.28**	.22**	.17*	.40**	.33**
友人との心理的距離の近さ		−	.42**	.48**	.03	.08
安心感・充実感			−	.59**	.02	.10
役割感・受容感				−	-.11	-.05
対人的不安					−	.61**
学業・生活不安						−

*p<.05　**p<.01

Table 5-2　男女別の各下位尺度間の相関係数

	友人への同調性	友人との心理的距離の近さ	安心感・充実感	役割感・受容感	対人的不安	学業・生活不安
友人への同調性	−	.32**	.29**	.24*	.18	.19
友人との心理的距離の近さ	.23*	−	.64**	.48**	-.10	-.07
安心感・充実感	.07	.24*	−	.51**	-.17	-.07
役割感・受容感	.04	.42**	.62**	−	-.28**	-.32**
対人的不安	.48**	.04	.05	-.03	−	.66**
学業・生活不安	.40**	.12	.09	.10	.60**	−

*p<.05　**p<.01
右上：男子、左下：女子

Table 5-3　学年別の各下位尺度間の相関係数

	友人への同調性	友人との心理的距離の近さ	安心感・充実感	役割感・受容感	対人的不安	学業・生活不安
友人への同調性	−	.15	.27**	.06	.31**	.20*
友人との心理的距離の近さ	.40**	−	.46**	.49**	-.25**	-.16
安心感・充実感	.18	.38**	−	.62**	-.04	-.01
役割感・受容感	.26*	.46**	.56**	−	-.21*	-.14
対人的不安	.49**	.33**	.07	-.03	−	.58**
学業・生活不安	.46**	.32**	.21*	.07	.66**	−

*p<.05　**p<.01
右上：5 年、左下：6 年

男子では役割感・受容感と対人的不安及び学業・生活不安との間に負の相関が見られたのに対し（それぞれr＝−.28, p<.01; r＝−.32, p<.01）、女子では相関が見られなかった（それぞれr＝−.03, *ns; r* ＝.10, *ns*）。また、男子では友人への同調性と対人的不安及び学業・生活不安との間に相関が見られなかったのに対し（それぞれr＝.18, *ns; r* ＝.19, *ns*）、女子では正の相関が見られた（それぞれr＝.48, p<.01; r＝.40, p<.01）。このように、性別によって特徴が異なることが推測されるため、男女別に分析する必要がある。

学年別の相関係数　学年別に各尺度間の Pearson の相関変数を算出したところ、学年で相関が顕著に異なるものがあった（Table 5-3）。例えば、5 年生では友人との心理的距離の近さと対人的不安との間に負の相関が見られたのに対し（r＝−.25, p<.01）、6 年生では正の相関が見られた（r＝.33, p<.01）。また、5 年生では友人との心理的距離の

近さと学業・生活不安や友人への同調性と役割感・受容感との間に相関が見られなかったのに対し（それぞれr＝−.16, *ns;* r＝.06, *ns* ）、6年生では正の相関が見られた（それぞれr＝.32, p<.01; r＝.26, p<.05）。さらに、5年生では友人への同調性と安心感・充実感との間に正の相関が見られたのに対し（r＝.27, p<.01）、6年生では相関が見られなかった（r ＝.18, *ns*）。このように、学年によって特徴が異なることが推測されるため、学年別に分析する必要がある。

友人との心理的距離の近さと友人への同調性が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響

全体の分析　各変数の影響関係を検討するために、Amos22.0を用いて共分散構造分析によるパス解析を行った。修正指数を手がかりとしながらモデルの修正を行い、最終的に採用したモデルをFigure 1に示す。なお、モデルの適合度はχ^2(7)＝8.38, *ns*, GFI＝.987, AGFI＝.960, RMSEA＝.031であり、モデルとデータの適合度は十分に高いことが示された。

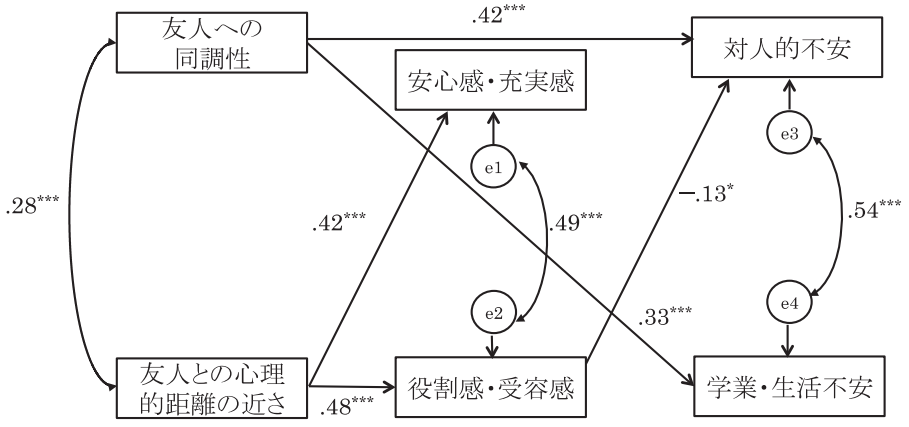
友人との心理的距離が近いほど役割感・受容感が高く（β＝.48, p<.001）、さらに対人的不安は低くなっていた（β＝−.13, p<.05）。また、友人への同調性から、対人的不安と学業・生活不安へ有意な正のパスが出ていた（それぞれ β＝.42, p<.001; β＝.33, p<. 001）。

男女の比較（多母集団同時分析）　友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響に男女差があるか検討するために、Amos22.0を用いて多母集団同時分析を行った。修正指数を手がかりとしながらモデルの修正を行い、最終的に採用したモデルをFigure 2に示す。なお、モデルの適合度はχ^2(12)＝ 5.61, *ns*, GFI＝.990, AGFI＝.966, RMSEA＝.000 であり、モデルとデータの適合度は十分に高いことが示された。

男女とも友人との心理的距離の近さから役割感・受容感へ有意な正のパスが出ていた（$\beta_{男子}$＝.48, p<.001; $\beta_{女子}$＝.42, p<.001; z ＝−1.18, *ns*）。また、男女ともに同調性から学業・生活不安へ有意な正のパスが出ていた（$\beta_{男子}$＝.28, p<.01; $\beta_{女子}$＝.40, p<.001; z＝.90, *ns*）。

パラメータ間の差の検定を行ったところ、友人との心理的距離の近さから安心感・充実感への男女のパス係数が有意に異なっていた（$\beta_{男子}$＝.64, p<.001; $\beta_{女子}$＝.24, p<.05; z＝−3.14, p<.001）。また、役割感・受容感から学業・生活不安へのパスについても、男女のパス係数が有意に異なっていた（$\beta_{男子}$＝−.38, p<.001; $\beta_{女子}$＝.08,*ns*; z＝3.25, p<.001）。役割感・受容感から対人的不安へのパスについては男女のパス係数に有意傾向の差が見られた（$\beta_{男子}$＝−.34, p<.001; $\beta_{女子}$＝−.06, *ns*; z＝1.83, p<.10）。友人への同調性から対人的不安へのパスについても男女のパス係数に有意傾向の差が見られた（$\beta_{男子}$＝.26, p<.05; $\beta_{女子}$＝.48, p<.001; z＝1.73, p<.10）。

学年の比較（多母集団同時分析）　友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響に学年差があるか検討するために、Amos22.0を



*p<.05　***p<.001

Figure 1　友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に及ぼす影響のパス解析の結果（全体）

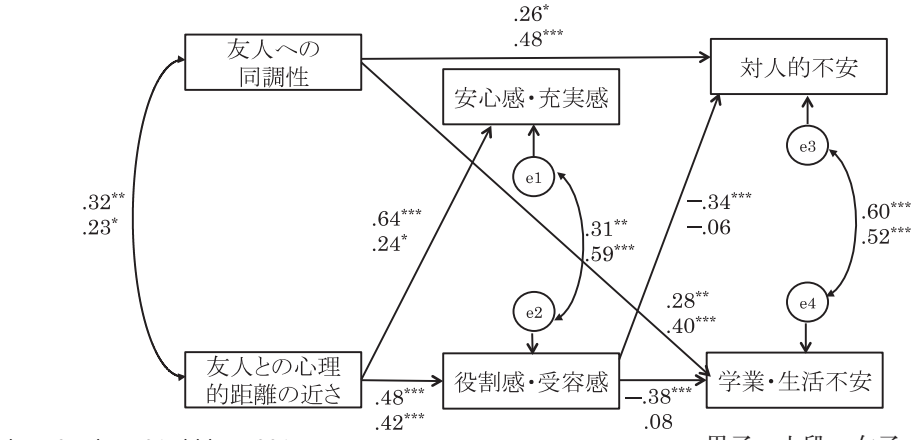


Figure 2　多母集団同時分析の結果（男女の比較）

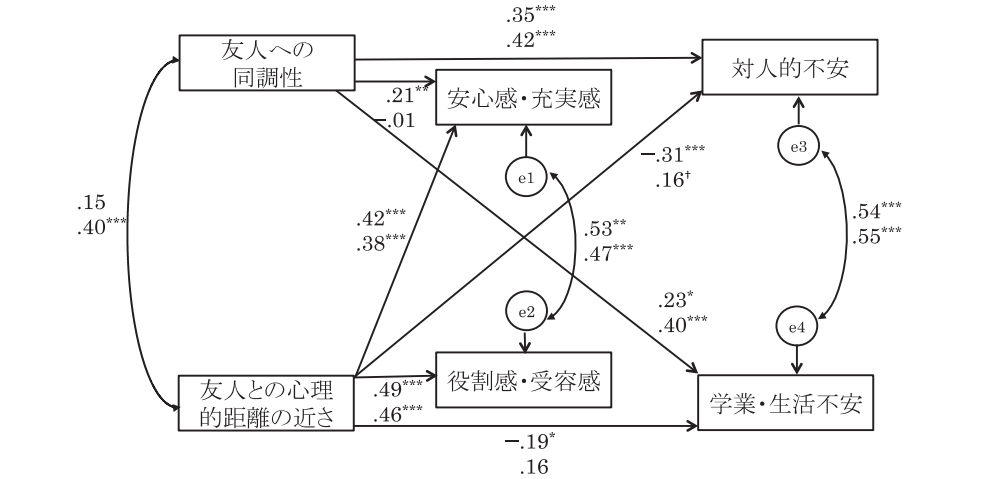


Figure 3　多母集団同時分析の結果（学年の比較））

用いて多母集団同時分析を行った。修正指数を手がかりとしながらモデルの修正を行い、最終的に採用したモデルをFigure 3に示す。なお、モデルの適合度は$\chi^2(10) = 13.97$, *ns*, GFI＝.978, AGFI＝.908, RMSEA＝.044であり、モデルとデータの適合度は十分に高いことが示された。

両学年とも友人への同調性から対人的不安に有意な正のパスが出ていた（$\beta_{5年生} = .35$, $p < .001$; $\beta_{6年生} = .42$, $p < .001$; $z = -.01$, *ns*）。また、両学年ともに友人への同調性から学業・生活不安に有意な正のパスが出ていた（$\beta_{5年生} = .23$, $p < .05$; $\beta_{6年生} = .40$, $p < .001$; $z = 1.06$, *ns*）。友人との心理的距離の近さから安心感・充実感へも両学年ともに有意な正のパスが出ていた（$\beta_{5年生} = .42$, $p < .001$; $\beta_{6年生} = .38$, $p < .001$; $z = -.033$, *ns*）。友人との心理的距離の近さから役割感・受容感へも両学年ともに有意な正のパスが出ていた（$\beta_{5年生} = .49$, $p < .001$; $\beta_{6年生} = .46$, $p < .001$; $z = -.45$, *ns*）。

パラメータ間の差の検定を行ったところ、友人との心理的距離の近さから対人的不安への男女のパス係数が有意に異なっていた（$\beta_{5年生} = -.31$, $p < .001$; $\beta_{6年生} = .16$, $p < .10$; $z = 3.65$, $p < .001$）。また、友人との心理的距離の近さから学業・生活不安へのパスも学年ごとのパス係数に有意差が見られた（$\beta_{5年生} = -.19$, $p < .05$; $\beta_{6年生} = .16$, *ns*; $z = 2.56$, $p < .01$）。友人への同調性から安心感・充実感へのパスについては学年ごとのパス係数に有意傾向の差が見られた（$\beta_{5年生} = .21$, $p < .01$; $\beta_{6年生} = -.01$, *ns*; $z = -1.96$, $p < .10$）。

考　察

友人との心理的距離の近さが学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響

友人との心理的距離が近いほど役割感・受容感が高く、対人的不安が低くなることがわかった（Figure 1）。従って、仮説1「友人との心理的距離が近い児童ほど学級適応感が高まり、中学校生活予期不安が低くなるであろう。」は部分的に支持されたといえる。友人と心理的なつながりを強く持ち、クラスで認められ、役に立っている感覚を持てることが中学校への対人的な不安を低減させる上で重要であると考えられる。

中学校入学前後でソーシャル・サポート提供者の中心が両親から親しい友だちへ移行するため（尾見, 1999）、小学校高学年期は、親との関係から徐々に友人との関係へ移っていく時期である。また、中学生や高校生になるとクラス以外にも対人関係を築いていくが、小学生はクラスの中で過ごす時間が大半であり、クラス遊びやグループ学習などの時間も多い。このような時期に友人と心理的なつながりのある信頼できる関係を築き、現在クラスで役割を見出せている感覚を得ることが中学校への対人的な不安を低減する上で重要と考えられる。

以上のように、クラスでの役割感・受容感が対人的不安を低減することが明らかとなったが、学級適応感から学業・生活不安へは影響が見られなかった。学業・生活不安は中学校の規則や学習、生活面に関しての不安である。学級適応感における役割感・受容感は、対人関係における適応感であるため学業・生活不安には影響しなかったと考えられる。

友人への同調性が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響

友人への同調性が高いほど対人的不安及び学業・生活不安が高いことがわかった（Figure 1）。仮説2「友人への同調性が高いほど学級適応感が低くなり、中学校生活予期不安が高くなるであろう。」では、学級適応感を媒介し中学校生活予期不安を高めると考えたが、友人への同調性が学級適応感を媒介せずに直接中学校生活予期不安を高めていた。従って、仮説2は部分的に支持されたといえる。

仲間はずれにされないよう友人に過度に気を使い合わせようとする同調的な行動は、「過剰適応」の状態ともいえる。「過剰適応」とは、「対人関係上の適応は良好となりながらも、内的適応が損なわれてしまった状態（益子, 2008）」である。桑山（2003）は過剰適応的な態度は周囲に同調し摩擦を回避するという意味では外的適応を促すが、自分の「生の感情」に向き合うことを妨げるという意味では内的適応に歪みが生じるものであると指摘している。また、石津・安保（2008）は、内的欲求を抑圧してでも集団への適応を優先させ適応の努力をすることは学校適応感を保つが、その一方でストレスは蓄積されている可能性があると指摘している。石本（2011）は同調すること自体は不適応につながらないと報告しているが、本研究の結果から、過度に他者に合わせることは、現在、友人との摩擦を避けて関係を作る上では有効であるとしても、ストレスを蓄積させ中学校に向けての将来への不安を高めていると考えられる。

学級適応感を媒介せず、友人への同調性が直接中学校生活予期不安を高めていたのは、調査の実施時期が早かったことが影響している可能性がある。5月の段階ではクラス替えにより子ども達はクラスでの立ち位置を模索している時期であったと推測される。今後は、クラスでの関係が築けた段階でも調査する必要があろう。

友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響の男女差

学級適応感が中学校生活予期不安に与える影響の男女差

役割感・受容感から学業・生活不安へのパスに男女の間で有意差が見られ、役割感・受容感から対人的不安へのパスでは男女の間で有意傾向の差が見られた（Figure 2）。すなわち、男子の場合は役割感・受容感が高いほど対人的不安及び学業・生活不安が低くなるが、女子の場合は、役割感・受容感は対人的不安及び学業・生活不安に影響していなかった。従って、男子の場合はクラスで認められ役に立っている感覚を得ることが中学校への予期不安を低減させるが、女子の場合には、学級適応感は中学校への予期不安に影響しないと言える。

男子の中学校への不安を低減するには、一人ひとりの子どもに合った役割を与え、クラスの中で

役に立っている感覚や認められている感覚を得られるよう工夫することが重要であると考えられる。例えば、授業中に歩き回る子どもに対し、プリントを配布する役割等を与えることで、普段叱られてばかりだった子どもも認められた感覚や役に立っている感覚を得られる可能性がある。一方、女子への支援として赤坂（2009）は、女子の本来の力を引き出すためには、学級や部活動などの所属集団で安心して過ごせる人間関係を作っていく必要性を指摘している。しかし本研究の結果から、女子の中学校への不安を低減するにはクラスで認められ役に立っている感覚を持てるように援助するだけでは不十分と考えられるため、今後さらに検討する必要がある。

友人との心理的距離の近さが学級適応感に与える影響の男女差

友人との心理的距離の近さから安心感・充実感へのパスに男女の間で有意差が見られた（Figure 2）。すなわち、男子の方が女子よりも心理的距離の近さが安心感・充実感を高める影響が強かった。従って、男子の方が女子よりも友人と心理的につながりを持つことがクラスで安心したり充実感を得ることにつながりやすいと言える。

男子はサッカーや野球といった大人数での遊びが中心だが、女子は親密性が高く自己開示が重要な意味を持つ（松嵜, 2008）。また、女子の方が男子よりも拒否に対する恐れや不安無しに人と一緒にいたいと考える親和傾向が強い（杉浦, 2000）。これらの知見から、女子の方が男子よりも友人と心理的なつながりを持つことがクラスでの安心感や充実感につながると予想されたが、本研究ではそのような結果は見られなかった。

ベネッセ教育研究開発センター（2009）によると、近年、テレビゲームで遊ぶ子どもが増えているという。昔に比べ外で大勢の友人と遊ぶ機会が減り、ゲームを持った者同士で集まり、対戦や通信をするといった遊びが増えていると考えられる。このような遊び方の変化から、男子の友人関係も大勢の友人との関係から少人数の友人との親密な関係へと変化している可能性もある。このことから、男子も友人と心理的なつながりを持つことがクラスで安心したり充実感を得られることにつながっていると考えられる。男子の方が女子よりもその影響が強かったことについては、今後さらに検討する必要がある。

友人への同調性が中学校生活予期不安に与える影響の男女差

友人への同調性から対人的不安へのパスに男女の間では有意傾向の差が見られた（Figure 2）。すなわち、女子の方が男子よりも友人への同調性が対人的不安を高める影響が強かった。従って、女子の方が男子よりも友人への同調性が対人的不安を高めやすいと考えられる。

男子にとってグループで過ごすことは好きなことをより楽しく実行する手段であり、グループは誰が入ってきても抜けても構わない比較的開放的なものと考えられている（赤坂, 2009）。一方、女子は男子よりも仲の良い友だちとばかり話をする傾向があるなど、排他的な小集団を形成しやすい（吉田・荒田, 1997）。女子にとってグループでいることは居場所作りの行動の一つであり、一緒に何かすることが目的というよりは「一緒にいること」が目的となっている（赤坂, 2009）。従って、自分の気持ちを押し隠して友人と過ごしている女子が少なくない（赤坂, 2009）。このように、いつ仲間はずれにされるかわからない不安を募らせ、自分の気持ちを押し殺している状況は心理的な負担になる可能性もある。以上のことから、女子は閉鎖的なグループに所属し、仲間はずれへの不安や友人に合わせないことへの不安が高まりやすいため、女子の方が男子よりも友人への同調性が中学校への対人的な不安を強めていると考えられる。

ただし、近年男子においても友だち関係の凝集性が高まり、仲間はずれにならないことが重要となってきているという指摘もある（ベネッセ教育研究開発センター, 2009）。従って、今後は女子だけではなく、男子の友人関係に関しても同調性という視点から検討する必要があると考えられる。

友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響の学年差

友人との心理的距離の近さが中学校生活予期不安に与える影響の学年差

友人との心理的距離の近さから対人的不安と学業・生活不安へのパスに学年の間で有意差が見られた（Figure 3）。すなわち、5 年生の場合は友人との心理的距離が近いほど対人的不安及び学業・

生活不安が低いが、6年生の場合は、友人との心理的距離の近さは学業・生活不安に影響せず、対人的不安については高める影響を与えていた。従って、5年生では友人との心理的距離が近いほど中学校生活への不安は低くなるが、6年生では友人との心理的距離の近さは学業・生活不安には影響がなく、対人的不安については高くなる傾向があるといえる。

6年生は5年生に比べ中学校への入学が間近に迫っているため、5年生から6年生になると中学校入学がより現実味を増し、新しい環境への期待や不安が高まると考えられる。こうしたことから、5年生よりも6年生の方が今は友人と親密な関係を築けていても中学校へ入学したらうまくやっていけるのかどうか不安に感じると推測される。また、今は友人と親密な関係が築けているからこそ、親しい友人と離れ、中学校で新しい対人関係を作っていく不安が高くなるとも考えられる。

友人への同調性が学級適応感に与える影響の学年差

友人への同調性から安心感・充実感へのパスに学年の間で有意傾向の差が見られた（Figure 3）。すなわち、5年生の場合は友人への同調性が安心感・充実感を高める影響を与えていたが、6年生の場合は友人への同調性は安心感・充実感に影響を与えていなかった。従って、友人に対する同調性が高いことは5年生ではクラスでの安心感につながる傾向があるが、6年生の場合、友人への同調性はクラスでの安心感につながらないといえる。

小学校4年生から高校2年生までを対象にしたベネッセ教育開発センター（2009）の「子ども生活実態基本調査」によると、「友だちといつも一緒にいたい」、「グループの仲間同士で固まっていたい」、「仲間はずれにされないように話を合わせる」、「友だちと話が合わないと不安に感じる」と答えた割合は小学生から高校生にかけて減っており、友人に合わせ仲間はずれにされないようにする行動は学年が上がるにつれて低くなっていくことがわかる。小学生の中での学年差は検討されていないが、同調行動は、仲間はずれにならない、いじめられないための重要な社会的スキルとしての役割を果たしていることからも（上野他，1994）、5年生では友人に合わせることもクラスで適応する上で重要である可能性がある。

ただし、5年生においても友人への同調性が高いと中学校生活予期不安は高まる（Figure 3）。このことから、5年生にとって友人へ同調することは、現在クラスで安心したり充実感を得られるためには重要な要因の一つであっても、不安やストレスを蓄積させ、中学校への不安を高めることにつながると考えられる。従って、友人に対する同調性が高いことは5年生にとっても必ずしも適応的とはいえない。今後、学年別により詳細に検討する必要があろう。

総合考察：小学校から中学校への環境移行の支援
―中1ギャップを低減するために―

本研究の知見を踏まえ、小学校から中学校への環境移行の際の支援について考える。本研究では、友人と心理的なつながりを強く持ち、クラスで認められ役に立っている感覚を持つことが中学校への対人的な不安を低減させることが明らかになった（Figure 1）。また、男女差及び学年差があることも明らかとなった（Figure 2, 3）。男子の場合、友人との心理的なつながりを持つとクラスで認められ役に立っている感覚が強くなり、中学校への対人的な不安が低くなることがわかった。一方、女子では、このような結果は見られなかった。移行後の新環境において、自分の予想と異なりその差を埋めることが容易でない場合、不適応状態になる可能性がある（南・井上他，2011）。小学校高学年期から以下のような支援を行い、中学校への不安を低減することが必要と考えられる。

第一に、男子においては友人と心理的なつながりを持ち、クラスで頼られ役に立っている感覚を得られる環境をつくることである。一人ひとりの子どもに合った役割を与え、役に立っている感覚や認められている感覚を得られるよう工夫することが重要であると考えられる。

第二に、学区内の同学年の子どもとの関わりを作ることである。6年生では友人と心理的に近い関係を持つことでかえって対人的な不安が高まる傾向があることがわかった。新しい環境で新しい友人関係を一から作り上げていくことは、大きな不安になると考えられる。その不安を低減するためには、同じ中学校区の同学年の子どもと関わる機会を作ることが有効と考えられる。例えば、同

じ中学校区の小学校間で行事を合同で実施し交流する機会を設けることにより、中学校入学後に一緒に過ごす仲間との関わりが具体的になり、不安も緩和することが期待される。

今後の課題

今後の課題としては、中学校受験をする子どもとしない子どもによる違いや、中学校入学が近い時期に検討することがあげられる。

引用文献

赤坂真二（2009）．女の子グループにおけるピア・プレッシャー（特集　思春期の女の子）児童心理，*63*（4），328-332.

ベネッセ教育研究開発センター（2009）．第2回子ども生活実態基本調査報告書　ベネッセ株式会社 <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id＝3333>

江村早紀・大久保智生（2012）．小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討　発達心理学研究，*23*（3），241-251.

橋本剛（2000）．大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究，*48*（1），94-102.

保坂亨（1998）．児童期・思春期の発達　下山晴彦編　教育心理Ⅱ発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会

保坂亨・岡村達也（1986）．キャンパス・エンカウンター・グループの発達的・治療的意義の検討　ある事例を通して　心理臨床学研究，*4*（1），15-26.

石本雄真（2011）．現代青年における友人関係の特徴と心理的適応および学校適応との関連発達研究，*25*，13-24.

石本雄真・久川真帆・齋藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平（2009）．青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連　発達心理学研究，*20*（2），125-133.

石津憲一郎・安保英勇（2008）．中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響　教育心理学研究，*56*（1），23-31.

金子俊子（1989）．青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究　青年心理学研究，*3*，10-19.

小泉令三（1995）．小学校中学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要，*44*，295-303.

小泉令三（2010）．“中1ギャップ”とは何か：環境移行の観点から（特集“中1ギャップ”を乗り越える）教育と医学，*58*（3），196-203.

桑山久仁子（2003）．外界への過剰適応に関する一考察:欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして　京都大学大学院教育学研究科紀要，*49*，481-493.

松嵜洋子（2008）．小学校から中学校への移行期における友人関係　埼玉学園大学紀要人間学部篇，*8*，213-219.

益子洋人（2008）．青年期の対人関係における過剰適応傾向と、性格特性、見捨てられ不安、承認欲求との関連　カウンセリング研究，*41*（2），151-160.

南雅則・浅川潔司・秋光恵子・西村淳（2011）．小学生の予期不安と中学校入学後の学校適応感との関係に関する学校心理学的研究　教育心理学研究，*59*，144-154.

南雅則・浅川潔司・福本理恵・古河真紀子・松本剛・古川雅文（2012）．中学校生活に対する予期不安と入学後の学校適応感に関する研究　教育実践学論集，*13*，103-111.

南雅則・井上博之・浅川潔司（2011）．中学校への環境移行における予期不安・リアリティショックと学校適応感との関連　兵庫教育大学都道府県連携推進本部，29-32.

三島浩路（2006）．階層型学級適応感尺度の作成―小学校高学年用―カウンセリング研究，*39*（2），81-90.

文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2014）．児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査　平成25年度10月速報値 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020101.do?_toGL08020101_&tstatCode=000001016708>

長根光男（1991）．学校生活における児童の心理的ストレスの分析―小学校4，5，6年生を対象にして―教育心理学研究，*39*（2），182-185.

Newman, B. M., & Newman, P.R. (1975). *Development through life: A Psychological approach*.
（ニューマン, B.M.・ニューマン, P.R.福富護・伊藤恭子（訳）(1980). 生涯発達心理学：エリクソンによる人間の一生とその可能性　川島書店）
岡田努（2002). 友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究　金沢大学文学部論集：行動科学・哲学篇, *22*, 1-38.
尾見康博（1999). 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究　教育心理学研究, *47* (1), 40-48.
坂口里佳（1999).「グループ化」とその行方　青少年問題, *46* (1), 16-21.
杉浦健（2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係―その発達変化―　教育心理学研究, *48*, 352-360.
上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護（1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離　教育心理学研究, *42* (1), 21-28.
山口豊一・水野治久・石隈利紀（2004). 中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連―学校心理学の視点を生かした実践のために―　カウンセリング研究, *37* (3), 241-249.
山本多喜司・S.ワップナー（1991). 人生移行の発達心理学　北大路書房
米澤孝雄・内藤勇次・浅川潔司・水掫義朗(1985). 小学校から中学校への環境移行（Ⅰ）中国四国心理学会論文集, *18*, 57.
吉田寿夫・荒田則子（1997). とかく女の子は群れたがる？：児童期における対人関係の性差に関する研究　日本教育心理学会総会発表論文集, *39*, 298.

まつした　りお（藤沢市子ども家庭課子ども発達支援担当）
いまじょう　しゅうぞう（昭和女子大学大学院生活機構研究科）